

# 不死の吸血姫がドSのご主人様を 募集しているようです

酒井仁

挿絵／にの子



あとみっく文庫／PDF立ち読み版

# CHARACTERS

## クレメンティア

魔界で最強の力を持つ *The Vampire Queen*  
吸血鬼。新たな刺激を求めて、人間界を訪れる。



## ミカ *The Succubus*

淫魔なのにろくに人を襲えない、純情な性格のクレメンティアの下僕。



## パレオロガス

クレメンティアに力を吸われ、猫や少年の姿しか取れなくなった魔族。 *The Demon*



# CONTENTS



7 ★第一章  
天使な淫魔と  
不死の吸血姫

★第二章  
鬼畜ジゴロと  
純情妹

63

113 ★第三章  
エッチなメス犬の  
野外品評会？

★第四章  
超不潔男との  
ときめき初体験中継

186

241 ★第五章  
描ましの公開搾乳  
淫乱奴隷

（そういえば、昨日のヘンテコな眼鏡女……手も足も縛り上げていたのに、どうやって逃げ出したんだか）

おかげでやりそこなったが、彼はすぐに興味を失う。

どうせ何度か犯して愉しんだら叩き出すだけの相手に過ぎない。

これまで彼が関係を持ってきた大勢の女たちと同じ、ただの行きずり。彼にとって女は肉便器と大差ない存在だ。

「いつまでこんなこと続けてるんだろうな、オレは……」

最低のジゴロ男とは思えない表情でぼつりとつぶやく。

と、空き教室の扉がからから……と開き、見慣れた顔の少女が入ってきた。

「あの、お兄ちゃん……」

「真由。こっちの校舎に来るなんて珍しいな、どうした」

ぶつきらぼうな兄の声にセミロングの髪を揺らした少女がおどおどと入ってくる。

（なんだ……？ いつもツンツンして小うるさいクセに）

恭輔のたった一人の実の妹、二つ年下の真由は、ちよつと生意気な美少女だ。

共働きの両親に代わり、家事炊事を甲斐甲斐しくこなすが、ときどきまるで母親のように振る舞うのが玉にきずだ。

だが誰よりも兄のことを心配する心優しい少女である。

「あの、昨日の女の人と……その」

ああ、と恭輔は自己嫌悪を感じる。

思春期の少女にとつて、毎日のように女を連れ込む兄の乱れた生活は、きつと心配の種に違いない。

「すぐにいなくなっちゃったよ。見るからにいかれた女だったし、もう家に連れてくることもないだろうよ」

「そ、そうなんだ……」

少女はほつとしたようにつぶやき、恭輔の傍らの机にちよこんと腰を下ろす。妹にしては珍しくしおらしい態度に違和感を覚える。

（それに、なんだか……いつもより真由がきれいに見えるぞ）

彼の妹はあどけなさが魅力の美少女で、お世辞にも肉感的とは言えない。

なのに、清楚な中にも男の目を惹きつける色気が立ち上っているようだ。

（妹相手に、オレは何馬鹿なこと考えてるんだ……！）

『ふっふっふ……わらわの色香を敏感に感じ取っているようだな』

矢萩真由——いや、矢萩真由という少女を喰らい、「存在」を奪い取った魔界の美姫クレメンティアは内心ほくそ笑んでいる。

あれからすぐ、クレメンティアは真由の部屋に侵入し、少女を「喰った」。他人から認

識されている「真由という少女の立場」を乗っ取ったのだ。

だからこの男にとつて、今のクレメンティアは妹にしか見えていない。

『さあ、血を分けた妹相手に獣欲を高ぶらせ、襲いかかってくるがいい。ゲスの本性のまにわらわを貪り犯すのだ』

狡猾な魔族の思考とは裏腹に、クレメンティアⅡ矢萩真由は瞳を潤ませ、上目遣いに兄の顔を見つめる。

その視線はすでに、充血しかけている股間の海綿体を察知している。

「まだ何か用なのか、真由。帰って飯の支度とかあるだろ」

「う、うん。そうなんだけど……あの、お兄ちゃんのこと心配で」

そう言つて胸に手を当て、さりげなく身を軽くひねると、腰のくびれのラインが強調される。

恭輔の視線がそこに吸い寄せられるのを確認した上で、クレメンティアは体表温度をわずかに上げて目元をポウと赤らめてみせる。

「オレはただ、尻軽女どもを相手に、暇つぶしをしているだけだ。お、お前に心配される筋合いはないぞ」

色気のオーラを発散させている妹の前に、彼は明らかに狼狽していた。

肉親に欲情するのは動物としての本能に反するタブー。インセストタブーへの忌避と獣

欲が彼の中で拮抗きつこうしているのだ。

『だが、貴様の本性は己の欲望を満たしたいというエゴ。我慢の限界を超えれば襲いかかってくるに違いない』

す……と太腿を開き、ボタンを外しておいた襟元が見えやすいようにする。

彼の目には妹の控えめな膨らみに見えているだろうが、実際に感じているのはクレメンティアの豊満な乳房が放つ色香。

「ど、どうしたんだ真由、い、いつものお前らしくも、ない……」

ここで魅了の術を使うのはたやすいが、それではつまらない。

クレメンティアは己の色香だけで、彼に近親相姦を犯させようとしていた。

じりじりと身をにじり寄せ、兄の長身に身を寄り添わせるようにすると、発情した牡の体臭を鼻孔に感じる。

「ま、真由？」

「た、ただの暇つぶしで、よその女の人と……そんなことするの、真由はお兄ちゃんにそんなことして欲しくないよ」

がちりとした肩に首を預け、少女の体温が感じられるほど密着する。

クレメンティアは自分の鼓動も早くなっていることに気づく。これは同化している真由という少女の影響だ。

『これは好都合、この妹にはもともと兄妹以上の感情があつたようだな。どんどん胸の奥が熱くなってくる……』

ただ妹の姿で誘惑するよりも、本人の感情が伴っていた方が近親相姦の楽しみは増すに違いない。

胸躍らせる吸血姫の目の前で、兄の瞳には欲情の光が宿り始める。

「よその人とエッチなことするくらいだったら、真由が相手をしてあげるわ。ねえ、それじゃダメかな？」

『声がふるえてしまうな……この娘の中にまだためらいがあるのか。だが、兄の欲情はもはや収まるまい。ほれ、このようにズボンの前をまさぐってはどうか？ おお、すでに熱く膨らんでおるわ』

少女のふるえる指先がジッパーを下げ、内側に手を滑り込ませる。

「お、お前、何を……オレたち、兄妹、なんだぞ……ッ」

そう言いつつも、彼は妹の手を振りほどこうともしない。

クレメンティアの思っていた以上に、この男の欲望は強力だ。心の中で舌なめずりしながら、兄のペニスを外にひっぱり出す。

「あ、あつい。これが、お兄ちゃんの……？」

『さすがにミカの包茎ペニスとは一味も二味も違うな。包皮はズル剥けだし、先端は赤銅

色、まるで金属のようだ、クックク」

半勃ち状態でも十分大きかった肉茎が手の中でむくむくと膨張し、少女の小さな手に収まりきらない巨大さに膨れ上がる。

遅しい肉幹には太い血管が浮き出ており、血脈は熱くたぎっている。

『猛々しい牡の匂いがぶんぶんしておるわ。それにしても実の妹に握られただけでこうも元気になるとは、とことんゲスな男よ』

ピンピンに張りつめたそれにわくわくしつつ、顔の表皮に走る血流量を増やし、照れているように見せかける。

「ま、真由、お前どこでこんなことを……まさか」

「ち、違うよ。こんなことするの初めてだし、お、お兄ちゃんにだけ……お兄ちゃんのおちんちんだから、平気だよ」

この少女は交際経験もない正真正銘の処女。

そんな乙女を乗っ取って実の兄との禁断の関係を結ぶとは、クレメンティアの興奮はいや増していく。

『さあ、妹は受け入れ準備が整っているぞ。欲望のままに、目の前にぶら下がった極上の獲物に食らいつくがいい！』

だが、外道のはずの青年は肩をふるわせて妹の手コキに耐えている。

妹を襲うどころか、何度も少女を引きはがそうとしているようにさえ見える。

『これでは埒があきそうもない、もう一押しを加えることにするか……では、このガチガチに勃起したモノを唇で……』

異臭がつんと鼻を突くが、口をいっぱい広げて被せていく。

「ちよ、待てっ！ う、ああああ……ッッ」

苦くてしょっぱいオスの味が口の中に広がる。

『クッ、青臭いミカのと全然違う。これは成熟したオスの味……！』

「うおおっ、ま、真由がオレのちんぽを……ッ！ くっ、吸いついてくる」

「れるっ、んっ、ちゅぽっ。す、すごい……おに、ちゃんの、味が……」

「そ、そんなところまで……ま、真由ッ」

「こ、この先っぽの周りが、んちゅっ、あ、味が濃いよ。じゅるるっ、お、お兄ちゃんの  
おちんぽ、お、おいひい……ッ」

相手が魔界の淫姫とも知らず、恭輔は愉悦の声を懸命に押し殺す。

『くくく、人氣が少ないとはいえ、いつ誰が入ってきてもおかしくない状況に、こやつも興奮しているのか。業ごうの深い……』

青年の発情を舌で感じてみると、ふと違和感を覚える。

『な、なんだ……は、腹の奥が、あ、熱い……ッ？』

じゅわっ。

下肢のつけ根が灼けるように熱く、肉裂から染み出た乙女の蜜が下着を濡らしていることにクレメンティアは気づく。

『なっ、反応が抑えられない!? ああっ、頭の芯が痺れる……お、お股から熱いモノが溢れて止まらない……ッッ』

妹の影響があることはわかっていたが、ここまでの影響とは予想外だ。

自分ではそんなことをするつもりはないのに、頭を必死に振り立てて兄の勃起ちゃんぽを唇でこすり立て始める。

「うああああ、真由ッ、そんなに激しく、だ、ダメだッッ」

『まさか、人間風情の意志の力がこれほどとは!! この娘の、兄への熱い思いが流れ込んでくる。兄を心配する気持ち、乱交をやめさせたい気持ち……いつそ自分が兄の相手をしたいたいという強烈な感情!』

魔力も持たず、脆弱で、呆れるほど短命な下等生物、人間。

人間の記憶などに興味がなかったので、心を覗かなかったのが災いした。人の感情の力の強さを、クレメンティアは完全に見誤っていた。

『か、感じる! この娘が、兄の陰茎をしゃぶる行為に夢中になっているのが! 兄の茎を悦ばせることに快感を覚えているのが!』

少女の強い感情はクレメンティア自身の肉体にまで影響を与え、魔姫の膝は興奮にぶると小刻みにふるえていた。

じゅるっ、ずじゅるるるっ。じゅぼ、じゅぼッッ。

『ちんぽをしゃぶっているだけなのに……こ、腰から力が抜け……!』

頭に膜がかかったようになって、思考能力ががくりと落ちる。

後に残ったのは発情したメスの本能——強力なオスに屈服し、支配されたいという剥き出しの感情。

『いかん、わらわまで欲望に流されてしまう。しかも相手はDSのご主人様候補、理性などかなくなり捨ててもおかしくはないはず……ううっ?』

むず、と大きな手がクレメンティア——矢萩真由の後頭部を押さえつける。

凄まじいポリユームの肉棒が口の中いっぱい押し込まれ、先端が喉の奥を抉るように突き上げる。

「げほっ、ちよ、待つ……んッ、んむうううッッ、むぐううう」

「ぬおおお!　ぐああ、うあああああッッ」

ぐぼっ、ぐぼぼっ。がぼ、がぼおおおっ。

恭輔はケダモノのように呻き、がすがすと妹の口を犯し始める。

クレメンティアの呼吸は完全に止まり、兄のズボンを掴んでなんとか離れようとしたが、



腕に力が入らない。

『いかん、腕力まで娘の存在に影響されている！』

完全に理性を失った恭輔は、掴み上げた妹の頭部を激しく己の股間に叩きつけ、クレメンティアの顔は骨盤と激しく激突した。

ぐぶぶつ、ぐぶ、がぼおつ。ぐつぽ、ぐぼ、ぐぶううつ。

「うごつ、んぶううつ……！ むぐ、ふむうう……ッッ」

それほどの痛みはないが、とにかく息が苦しい。

『こ、この娘、これほど乱暴にされているのに、胸の奥がますます熱く……相手が兄だから、痛みや苦しみも快感に転じるといふのか？』

「うおおおお、おうつ、おうう、おううううッッッ！」

抵抗する気力も失せ、両腕をだらりと垂らした少女の唇を、喉奥に達するほどのディープスロートで犯し続ける。

酸欠で意識が遠のきかけたそのとき、唐突にその動きが止まった。

口の中で極太のペニスが暴れ馬のように跳ね回り、喉奥に熱湯のようなものがびしゃつとぶちまけられた。

「おう……ッッ、う、ああ………ッッッッ……」

『す、すご……熱くて、ねばっこののが喉を滑り落ちていく……』

胃袋から逆流する生臭い異臭は、男の子種のたつぷり詰まったザーメン。

げっぷが出そうなほど大量に精を放ったにもかかわらず、彼の男根はほとんど萎えてもいない。

唾液と白濁液にまみれた肉棒が「ぐぼおっ」と引き抜かれると、それは天を仰いで反り返った。

「けほ、けほっ。お、おにい、ちゃ……」

新鮮な空気を肺に送り込みながら、上目遣いに兄を見上げる。

そこには黄色く濁った目が爛々と輝いている。表向きは怯えた表情を浮かべながら、クレメンティアは心の中で快哉を上げる。

『妹の唇を陵辱して、こいつの中の獣がついに目覚めたか！ ふふふ、これは楽しみなことになってきたぞ』

口内射精のショックか、真由の意識の圧力が弱まっている。

『人間にいつまでも振り回されているわけにはいかなからな。あらためて娘の意識には手綱をかけておくとしよう』

精神をリンクさせることで、身体の支配権を掌握したまま、少女の感情だけを共有することができるとだ。

『ほう、こんな目に遭わされても、まだ恐怖していないか。次はいよいよ禁断の一線を越

えるに違いない、わくわくするのう』

兄の腕がガツと肩口を掴み、力任せに引き起こされる。

そのまま傍らの机にうつぶせに押し倒されると、期待に胸が躍る。

「はあ、はあ、はあ……まゆ……真由………ッ」

すごい力で肩胛骨の辺りを押さえつけ、手がスカートの中に滑り込んでくる。

引きちぎるように下着が剥ぎ取られると、外気に臀部がひやりとする。

『よし、ここでだめ押しだ』

「お、お兄ちゃんっ、だめッ。わ、私たち兄妹なんだよッ」

と、抵抗するつもりもないがいちおう言うておく。

もつともこの少女が力いっぱい抵抗したところで、大柄な兄の腕一本振りほどくことはできないだろう。

『体格差、腕力差は歴然。この男は目の前の女体を貪り犯さねば気が収まらないだろう、たとえそれが血を分けた実の妹であっても……!』

机に突っ伏したままでいると、足のつけ根がじんじん疼いてくる。

クレメンティア自身も犯されることに期待している証拠だ。

『いよいよ……魔界の統治者たるわらわが、人間などというちっぽけで下等な存在に犯されてしまうのだな』

吸血姫の胸と股間は燃えるように熱く潤う。

『メス犬同然に押し倒され、抵抗もできず、猛り狂った下品なちんぽで貫かれてしまうのか。ああつ、なんとという倒錯……!』

ふと、魔界での戯れを思い出す。

力の差も理解できず、クレメンティアを餌と見なしていた愚かなトカゲども。

これからクレメンティアを犯そうとしている人間は、あのトカゲよりもずっと弱く脆い下等生物なのだ。

『そんな脆弱な生き物が、ああつ、わらわの背中にのしかかって首筋に顔を埋めているッッ! うなじの匂いを嗅いで息を荒くしている……!』

掴まれた襟元のボタンは今にもはじけ飛びそうだ。

「ふっ、ふはッ。おおお、すっげ……いい匂いだ、すげえ」

大きな手が身体の前に戻され、胸と机との間に差し込まれる。

制服の上から豊満な乳房を力任せに握りつぶし、柔らかさと温かさを貪るようにぐいぐい揉みしだいてくる。

『クウッ、乳首つままれ……こね回され、るぅっつ!』

愛撫とも呼べない荒々しいだけの行為は、自分が支配者なのだとして少女に教え込もうとしているようだ。

クレメンティアが後に続き、薄暗い室内からきちんと掃除された廊下に出ると、別世界に足を踏み入れたようだ。

「ババアはまだ帰ってないな。く、クレメンティアとか言ったな。ほ、本当に一緒に風呂に入るんだな、今さらいやだとか言うなよ！」

「でも、服を着たままで入浴できませんわよ、ご主人様。さあ……わたくしが脱がせて差し上げますわ」

明るい脱衣所の明かりの下で見る男の顔は、想像以上に醜い。

造作がどうのではない。不健康な食生活と不潔さのため、顔は脂でテカテカ、吹き出物だらけだ。

脱がせたシャツとトランクスはこの世のものとも思えぬ異臭を放ち、垢でどす黒く変色している。

たるんだ腹の下でペニスが早くも勃起しているが、お世辞にも大きいとは言えず、皮かむりの先端からは饅えた匂いが漂っている。

(下着に染み込んだ精液の腐った匂い……ああ、頭がくらくらする！)

込み上げてくる吐き気と、こんな不潔男にかしずかねばならないという不快感が隷属の快感となって背筋が痺れるようだ。

男はご主人様のように自分から何もすることなく全裸に剥かれると、二週間ぶりに風呂

場のタイルを踏んだ。

男の母親は几帳面な性格なのか、浴室には黒カビの染み一つない。

「ここにお座り下さい。それでは……」

「わわわ、な、何を……おほううっ？」

洗い椅子に男を座らせると、クレメンティアは彼の真正面に膝をついた。

男の身体は汚れきつており、普通ならまずは熱いシャワーを浴びせてごしごしと垢や皮脂を落とすたくなるところだ。

「おふう？ ボクじゃなく自分に湯をかけるナリか？」

湯をかけられた水着は透明度が増し、桃色の突起や金のアンダーヘアまでくつきり透けてしまう。

（くくく、エロDVD五〇〇本で研究した、わらわの超絶技を食らうがよい！）

ド迫力の巨乳を手で持ち上げると、金髪美少女メイドは魅惑の膨らみを押しつけるように、男に抱きついてきたのだ。

「ふほおおうっ！ お、おっぱい、柔らかかッ！ おっぱいふよふよで温か！」

「言ったでしょう、わたくしの全身で洗って差し上げると……」

ぶよぶよした男の背中に腕を回し、身体を擦りつけ、男の首筋に顔を埋める。淫らに舌を蠢かせると、首筋をれるれろとねぶり始める。

「れろっ、ちゅっ、れろれるる……ご主人様の味がしますわ。とても男臭くて、野性味溢れる味と匂いでゾクゾクいたします」

「むほっ、ほおおっ！ お、女の子が舌でボクの身体を……ッ？ それに、おっぱいが当たって、むほおおおっ……ッ」

汗と埃と垢と皮脂にまみれた男の身体は、想像以上に不潔で、舌を這わせるたびに嘔吐感が込み上げる。

だが、こんな汚らしい男に奉仕している自分の姿を意識するだけで、クレメンティアの身体は熱を帯び、胸は高鳴っていくばかり。

マゾヒスティックな快感に、魔界の美姫は打ち震える。

（なんと卑屈な振る舞いか、わらわともあるうものが、こんな下賤な男にここまでの奉仕をしてみせるなど……だが、それがいい！ それが倒錯の快をわらわにもたらしてくれるのだ……!!）

首筋からあごへ唇を移動させると、無精髭ぶしようひげがちくちく痛い。

黄色く濁った男の目を見つめながら、タラコのような唇に自らの花の蕾のような唇を重ねる。

舌を差し込むとドブ臭が押し寄せ、クレメンティアの頭を熱く沸騰させる。

「んう、んちゅっ、れる、れる……はあ、んっ。ご、ご主人様あ」

「ぶふむつ、じゆるつ、こ、これが女の子の唇！ むちゆる、ぶちゆうつ」

ミカなら失神するか嘔吐するであろうキスを交わしながら、不潔な髪を指でかき回す。指がにちゃにちゃするのは頭の脂だろう。

脂の異臭の源に顔を埋め込ませ、目がちかちかするような匂いを吸い込みながら、巨乳を男の顔に押し当てる。

膨らみの中心に硬くしこった突起を見つけると、男はそれを力の限り吸い上げた。

「ふむうううつ、おっぱ、おっぱいいおっぱいいいッッ。むちゅつ、じゆる、ちゅむううううう」

「ああ、い、痛いッッ。痛いけれど、す、吸って下さい！ おっぱいの先つちよ、味わって下さいッッ」

「むぶふううう、れろつ、ちゅば、ちゅじゆるるる〜ッッ」

ピンク色の突起が吸い上げられ、歯が食い込み、ちぎれんばかりに食られる。

甘い美少女の体臭を豚のように吸い込み、乳房の柔らかさに酔いしれ、なよやかな女体を折れんばかりに抱きしめる。

「はあつ、はあ、はあ……も、もつとご主人様の全身を、ねぶらせて下さい。心を込めてご奉仕いたしますから……」

クレメンティアは男の首筋から胸を丹念に舐め清めていく。

彼はただ不潔なだけでなく腋臭ワキガであり、脇の下をねぶついているときは鼻が曲がりそうなほど臭かった。

「ど、どうだ。ボクの脇は臭いだろう」

「はいっ、臭いですッ。臭くて素敵ですッ。れる、れる、むちゅっ」

たるんだ腹に移動して、皺の奥の奥までねぶつっていると、男の手が水着の上から女体を触り始める。

無論、それを拒むわけもなく、完璧な女体は無遠慮な男の愛撫に晒される。

「むひひひっ、な、なんて柔らかいんだ。うお、うぼおおっ」

痛いほど尻が掴み上げられ、その痛みが、被虐の快楽を生み出す。

（ああ、女の扱いも知らぬ童貞男の手で、弄ばれている！ なんて惨めで、なんて恥ずかしくて……なんて心躍るのだろう！）

こんな男に自分は処女を捧げ、もしかしたらこの人間の子を身ごもってしまうのだ。

考えるだにおぞましく、クレメンティアの胸は期待に打ち震える。

「んふっ、ぺちゃっ……おへその中までびかびかにして差し上げましたわ。次はいよいよ……ご主人様の」

ひときわ腐臭を放つ包茎ペニスに指を絡めようとするが、短小の上に腹肉に埋没しているのでしごぎにくいことこの上ない。

「ぼ、ボクは包茎じゃないぞ、いちおう、仮性包茎なんだからな」

（ふむ、包皮を剥いて洗う習慣があればここまで異臭を放つこともないのだが……まさに生ゴミに匹敵する汚物ちんぼだな）

「い、いやか？ ボクのちんぼを舐めるのはさすがに……うおっ!？」

男の目が驚きに丸くなる。

汚らしいイチモツをうつとりと見つめていた水着美女が、一瞬のためらいもなく、ぱくりと口いっぱい頬ばってきたのだ。

「んふっ、んむううう……ッ。んふ、むちゅっ、れろ、べちよっ」

「おおおおお、舌がっ、絡みついてッッ。口の中ッ、あつたかくて気持ちいいっ！ すげっ、これすげええええ」

「んぐうううッッ？」

興奮のあまり男はクレメンティアの後頭部を掴み、自分の下腹部に押しつけてきた。ぐい、ぐい、ぐいってと短小包茎不潔ペニスを喉奥めがけてねじ込んでくる。

（うぐううっ！ こ、これはさすがに……）

イラマチオと呼ぶにはあまりに乱暴な振る舞いに魔姫も苦しげな声を漏らす、その声に興奮した男は動きをいっそう乱暴にする。

「うもっ、むほおおっ、ほう、ほうううう……ッッ！」

がくがくと洗い椅子から腰を浮かせて突き上げると、短小とはいえ先端が喉奥を挟り、クレメンティアは何度もえずく。

(に、苦いッ、苦くてしょっぱいッ。息苦しくて、頭がくらくらする……ああ、もつと、もつと激しくわらわを辱めてくれ……ッッ！)

吸血姫が息苦しさに失神するより先に、溜めに溜め込んだ欲望が限界に達する。

「うひよほおおおおんんつつつ！」

奇怪な叫びと共に、汚茎からどくどくと勢いよく白濁液が噴出する。

(ぐっ……ザーメンが濃厚すぎて、喉にへばりつく……ッ)

しょっぱい味と匂いを撒き散らす汚液を飲み下すこともできず、クレメンティアはかろうじて鼻で呼吸を確保する。

「ん………んぷっ。んつく……んっ、ご主人様のちんぽミルク、すごい量、それにとつても濃厚なお味ですわ」

「の、飲んだのか。ボクのザーメンを、本当に飲んじゃったのか。そ、そんなきれいな顔で、笑みまで浮かべて……」

信じられない、という男の表情がやがて醜く歪み、残忍な笑いを浮かべる。

金髪テールを掴み包茎茎に近づけると、舌で舐め清めるように命令する。

「ほ、包皮の内側も舐めてきれいにするんだ。で、できるよな」



「ああ……黄色い滓カサがいっぱいこびりついて、チーズみたいな匂い」

いったいどれほど洗わず放置していればこんな大量の恥垢が蓄積されるのか。ぶ厚い包皮の内側には、指でこそげ取れるほどのチンカスが付着している。

鼻孔に突き刺さる匂いに可愛い鼻をひくつかせながら、美しき悪魔は舌で汚滓をねぶり取る。

「んっ、んふ、臭くておいひい……ご主人様の、チンカスおいひいれふ」

「ぶひひっ、ほ、ホントにチンカス食べてるよ、この女。キ、キンタマの裏側もくまなく舐めるんだぞ」

「はひ、んむう、んぶっ……おえっ、おぷ、おむうう」

蒸し込んだ陰囊裏にも垢はたっぷり付いている。

クレメンティアは端正な顔を突っ込み、不潔な股間をぺちやぺちや舐め続ける。

「えぶっ、うく……ッ。わたくしの唾液で、ご主人様の垢を溶かして差し上げますわ。んむっ、れろれろ……ああ、苦くてしょっぱい」

絶世の美少女のご奉仕姿に、不潔陰茎はまた勃起していく。

「ふひひ、すごいな、悪魔つてのは。汚いちんぽしゃぶって、ザーメンをおいしそうに飲んで、まるつきり、へ、変態だな、ええ？」

「は、はひ、わたくしはご主人様にお仕えする、変態奴隷ですわ。後ろを向いて下さい、

「ここもちゃんと清めて差し上げますから」

「むひほおお〜っ、し、尻の穴まで〜っ?」

ぶよぶよたるんだ尻肉を押し広げると、クレメンティアは不潔男の身体の中でも群を抜いて異臭を放つ尻穴に迷わず舌を差し込んだ。

（苦ッ、臭ッ！ ま、まさに最低最悪の場所を、わらわが舌先でくすぐっている！ ゲス男のケツ穴ねぶってるだけなのに、お、お股熱いッッ！ ああすごい、も、もうこんなに蜜が!?!）

指の腹でクリトリスを軽く押しただけで、稲妻のような快感が背中を走り抜け、頭のてっぺんでスパークした。

「んうううっ、れる、れちゅうっ」

「ほおう、ほうっ、くすぐりたいけど気持ちいいッ。むふふう、またちんぽがピンピン勃起してきた〜っ。っ、次は……おい、変態マゾ女！ けつ舐めはもういい、四つんばいになってケツを向ける！」

「はい、仰せのままに」

男は、童貞とは思えないような尊大な態度を身につけつつある。

それはひとえにクレメンティアの従順さが誘発したものであった。

（ふふ、こやつのような童貞の引きこもりでも、自分が完全に優位に立てる相手には、ど

こまでも厚かましくなれるようだな)

たとえば年老いて抵抗する気力もない両親、あるいはネットの向こうの顔も見えない相手に対して強気になれるように。

(否、童貞とか引きこもりが原因ではない。この尊大で加虐的な態度こそが、こやつの本質そのものなのだ)

ましてやクレメンティアのような極上の美少女が、M奴隷そのものの態度を固持しているという事実が、彼をいつそう増長させている

「ぐふふふ、ご、ご主人様が褒美をくれてやる……どうだ、うれしいか」

「はいっ、ありがとうございます、ご主人様！」

待ちに待った言葉に、クレメンティアの胸は期待に膨らむ。

気の遠くなるような太古から今まで、誰にも許してこなかった吸血姫の処女聖地に、初めて男のモノがぶち込まれるのだ。

それも、人間などという滓みたいな存在の中でも、不潔で冷酷で傲岸不遜な、最低最悪の不潔男のイチモツが。

(ああ……ッ！ 興奮で頭が爆発しそうッッ、触れてもないのにおま○この蜜がどんどん溢れてくるッッッ！)

「うほおおんっ、なんてきれいなお尻……き、金の陰毛に、こ、これが本物のおま○こ！

「ここにちんぽを、ぐひっ、むひ、うひひ」

鼻息がかかるほどの至近距離で乙女の花弁を覗き込んでいた不潔男は、ふと何かを思いついたように顔を上げる。

「そうだ、この状況を記録して……いや、ネットで世界中に生配信中継だ！　ぐひゃひゃ、おい、部屋に行くぞ」

「そ、そんなっ。ご褒美は下さらないのですかッ」

男の気まぐれに、思わず声を上げる。

股間は灼けるように熱く疼いている。これ以上お預けを食わされると、頭が変になりそうだ。

「お願いです、お慈悲を……ご主人様の、おちんぽ下さいッ」

「ええい、うるさいうるさいッ！　奴隷のクセに生意気な……そんなに欲しければ、こっちにくれてやる!!」

「あひい？」

男が亀頭を押し当てたのは、クレメンティアのアヌス。

不意打ちとたつぷりまぶされていた唾液のぬめりで、イチモツはめりめりと乙女の尻穴を貫き、めり込んでいく。

「いぎいい、ひぐううう……ッッ！　おっ、おひ、りいい……ッッ」

それを金髪美少女の首にはめると、まるでペットでも連れてくるかのように、マンションを後にしたのだった。

その二人を見た者が真っ先に思いつくのは、「AVの路上撮影」だろう。

何しろ巨乳も露わなエロドレスを着た金髪美少女が首輪をつけ、銀髪の美少年にペットよろしく連れ回されているのだ。

休日の真っ昼間、ここは歩行者天国。そのど真ん中に、二人は突如現れた。

外国人らしい少年は不敵な笑みを浮かべ、傍らの金髪乳出し美少女は顔を真っ赤にして人々の好奇の視線にもじもじしている。

「ううっ、こ、こんな恥ずかしい格好を、こんなたくさんの人に……」

「隠すなよ、人間どもにそのでかい乳をじっくり見てもらえ」

冷酷な少年の言葉に愛らしい眉をひそめつつ、命じられるままに身体を反らして乳房を突き出す。

乳だけでなく、超ミニスカートの裾からも太腿がほぼつけ根まで、黒レースの下着に包まれたくりつと丸いヒップも丸見えだ。

「そんな邪魔つけなもの、さっさと脱いでしまえ」

「こ、ここですか？ そんな、恥ずかしいこと……きゃっ」

ぴしゃりと尻を叩かれ、クレメンティアは茹だでだのように顔を真っ赤にしなが、ショーツに指をかける。

その行為に、どこかにカメラがいるはずだときよろきよろする人も出てくる。

「お、おいおい、パンツ脱いでるぞ……すっげえ」

「オレ、写メ撮っちゃお」

一人が携帯を構えると、後はイモヅルだった。

次々と携帯が向けられ、美少女が下着を脱いでいく光景が何十枚も撮影されていく。

「あ、ああ……み、見られてる、いっぱい撮られてる……ッッ」

目尻に涙を浮かべつつ、クレメンティアの顔は愉悦に火照り、下着を取り去った股間は熱い蜜で溢れている。

（剣がなくなつた胸にぽっかり穴が開いたようで、い、いやだつて言うこともできない。わらわはどんな非道な命令にも、従うしかないのだわ……）

だがそんな自分の境遇を思うだけで、えも言われぬ快感が込み上げてくる。

「おい、キミたち！ ここで何やってんだ、許可は得ているのかね？」

鋭い声にギャラリーから残念そうな声上がる。

警官が二人駆け寄ってきて、人々は左右に広がり道を空ける。

「困るんだよねえ、勝手に撮影とか……つて、子どもじゃないか。大人の人はどこ？ ほ

らキミも胸隠して、ええと、日本語ツウジマスカ？」

年端もゆかぬ少年と、乳房を丸出しにした金髪美少女の前に、警官も困惑気味。

だが、オロガスの目が妖しい光を放ち始めると、警官の目から正気の光が一瞬で失われ、ぼんやりした態度でぎこちなく敬礼をする。

「お邪魔をして、申し訳ありません……どうぞ、お続け下さい……」

「な、なんだあの警官」

警官の不審な行動に、取り巻いていた人々にも動揺が広がりがけるが、すぐにざわめきは収まる。

だがその目つきは先ほどまでのものとは違う。たまたまAVの路上撮影に居合わせてラッキー、でも人目も気になる……というようなものではなく、さも当然という顔で羞恥衣装のクレメンティアを視線で犯している。

気がつけば歩行者天国に居合わせた人間すべて——およそ三〇〇人は下るまいという群集全員が、オロガスたちを見つめている。

「見るよ、あのでけえおっぱい！ とんでもないエロおっぱいだな」

「さすがはパレオロガス様ご自慢のメス奴隷、いやメス犬ね……なんてはしたないのかしら」

「じゃが、メス犬なら立っているのはおかしかろう。犬は犬らしく四つんばいになるべき

だとわしは思うぞ」

若い女性や老人までもクレメンティアを指さしてメス犬呼ばわりをし、はしたない、いやらしいと罵り、嘲りだす。

（こ、これはオロガスの「魅了」か……随分と広範囲でかけたものだ……この近隣すべての人間は、もはやオロガスの、いやご主人様の意のまま……!）

意のままに操ることのできる数百人の人間たちに、少年は満足げに頷いている。

「ふむ、メス犬はメス犬らしく、か。クレメンティア、その場で四つんばいになれ。尻を振って媚こぼを売ってみせるんだ……早くしろ!」

「は、はいっ」

少年の鋭い叱咤しつたに飛び上がると、哀れな少女はアスファルトに膝と両手をつけて犬のように四つんばいになった。

下着もなくした尻をふりふりと左右に振って「くうん、くうん」と犬のように鳴いてみせると、人々はげらげら笑って手を打って喜ぶ。

「なんだか嬉しそうじゃないか、あんな格好させられてるのに。あのメス犬、本物の変態だな」

「オレたちにケツ穴見られて感じてるんだよ、そうだろ変態女!」

「ああっ……そ、そうです。み、みなさまに、ケツの穴まで見られて、お……おま〇こが、

疼いてしまつて……いい、ます……ッ」

言い終えてさすがの恥ずかしさに俯いてしまふが、オロガスに首輪の鎖をひっぱられ、強制的に顔を上げさせられる。

オロガスがそのまま鎖を手を歩きだすと、クレメンティアは本物の犬のように四つんばいで後をついていくしかない。

すると行き交う人々がその哀れな姿を指さし、あざけ笑い、汚いものを見たかのように顔を背け、ある者などは唾を吐きかけていった。

「あんたみたいないやらしい雌豚がパレオロガス様のペットだなんて、きい悔しい、妬ましい！」

脂ぎつた肥満女が、鬼の形相でクレメンティアを睨みつける。

「ああパレオロガス様、この淫売の尻を蹴飛ばしてもよろしいですか」

「これは美しいお嬢さん、蹴り飛ばすもよし、そのヒールのかかとを、ケツの穴にねじり込むもよし、好きなように」

どう見ても四十路は越えているであろう醜い中年女は、乙女のように顔を赤らめ、大根のように太い足をよっこらしよと上げる。

「このっ、盛りのついた売女、淫売ッッ」

げしっ、げしっ。どすっ、ばすんっ。

「ヒールのかかとを、ケツ穴にくれてやるよ〜ッッッ」

「ふひいんっ！ おほっ、おケツの穴にッ、突き刺さっ、ひぎいいいっ」

ぐりぐりと念入りに肛門を抉る女の責めに、金髪美少女は髪を振り乱して悶え狂う。

醜くも淫ら極まる光景に、男たちは前屈みにならざるをえない。

「くっくく、魔力の源を奪われたとはいえ、あのクレメンティアがこんな醜態を晒し、いたぶられて喜んでいるとは、これほどの愉快があるうか！」

少年は唇を歪めて悪魔そのものの笑みを浮かべると、鎖をひっぱり上げる。

「ひとしきり人間界を蹂躪したら、とつとと魔界に帰ろうと思っていたが……もう少し楽しんでいくとしようか」

上体を引き起こされたクレメンティアが苦しげに呻くと、水晶玉が転げ落ちる。

水晶の中では、淫魔少女が内側から水晶を叩いて抗議しているのが見える。

「お前なんぞいたぶっても面白くない……せいぜいそこで自らの創造主の痴態を見物するのだな。クレメンティア、お前はこの人間どもにサービスをしてやるがいい、その下品な乳でな」

「は……い、パ、パレオロガス、さま」

従順なDM奴隷少女のはしたない巨乳に注がれる無数の視線、視線、視線、視線。

怯えた上目遣いで人々を見上げる吸血姫のニップルが、羞恥と興奮でたちまち硬くしこ

り、小指の先ほどに充血勃起する。

火照った肌から漂うのは、乙女の汗とほんのり甘いミルクの香り。

「ど、どうか……恥ずかしいわたくしのおっぱいを、お搾り下さい……」

両手で乳房を持ち上げると、傍らにたくさんのコップの載ったカーゴとコンパニオンが出現した。

手品のような光景に人々は驚くどころか殺到し、たちまちにして長蛇の列ができる。「最後尾」の看板があつという間に遙か彼方に遠ざかっていく。

「くっくく、ざっと二百人以上はいそうだな。乳が足りるかな」

そしてコップを手にした最初の男が、クレメンティアの正面に仁王立ちになる。

「ふひひつ、こりやあまつたく見事なエロ乳だ。どら……うおつ、ちよつと揉んだだけで母乳が噴き出してきやがる！」

「んああつ、い、言わないで……ッ」

恥ずかしさに悶える淫乱奴隷の乳房に、指が沈み込んでいく。

すると桃色突起から白い液体が迸り、コップをみるみる満たしていく。

甘い母乳の香りに誘われ、別の中年サラリーマンらしき男が反対側の乳房に手を伸ばし、思いきり房を掴み上げる。

「ふわあああつ、おっぱいちぎれちゃいます……ッ」

「おう、なんてやわやわおっぱいだ！ この乳の香りがたまらねえッ」  
ぎゅむ、ぎゅむうううっ、びゅーっ、びゅびゅーっ。

「すげえ、面白いように乳が通りやがる!! うぐ、んぐっ、んぐ……ごくんっ」

コップになみなみと注がれた母乳を一気に飲み干した男の顔が、恍惚に染まる。

うっとり和金髪メイドを見つめるその目は、エロスの女神を讃<sup>た</sup>える目。それに気づいた少年が、ジャラリと鎖を強くひっぱる。

「乳に含まれた魔力で人間を魅了しているぞ、クレメンティア。この世界、そして人間どもはお前のしもべではない、私のものだ。そしてお前は私の忠実な奴隷……そのことを忘れるな！」

「あああつ、す、すみませんスマセンッ！ わたくしは、パレオロガス様のもの、いやらしいただのミルクスタンドですッ。だらしなくミルクを垂れ流すしか能のない、乳牛ですうう〜っ」

魔力を失ったことで気弱に、そして卑屈になった魔界の美姫の言葉に、群集の興奮が一気に加速する。

「よおし、この乳牛めッ、おっぱいを搾り尽くしてやる！」

「ああああんっ、お乳搾られるの、きもひいいですうう〜っ」  
びゅっ、びゅるるっ、どびゅるびゅる〜っ。

「俺の実家は酪農やってんだが、こんな乳の出がいい牛は初めてだ。見ろ、乳の太さがうどん、いやきしめんサイズだ！」

「ああつ、酪農家さんの手つき、エロ気持ちいい〜ッ」

豊満な乳房から滾々こんこんと湧き出る母乳は次々に器を満たし、人々の喉を潤す。

力任せに乳房をこね回される痛みさえも、金髪姫の倒錯した脳髓に電流のような快楽をもたらすのだ。

「はひいいつ、乳腺揉み潰されるううっ！ お乳噴き出るのは、最高れすううっ」

「えい、まどろっこしい、俺は乳首から直接飲ませてもらうぜ」

「てめえ、かぶりついてひっぱるんじゃねえ！ びーちくがガムみたいに伸びちまつてるじゃねえか」

「はぶつ、ちゅむつ、おおうめえ、いくら飲んでも満足できないい〜」

母乳という甘露を飲み足りない人々が口汚く罵りあい、乳首の奪いあいをする様を、クレメンティアはおろおろと見守る。

「くくく、さすがはクレメンティア、なかなか優秀なミルクスタンドだ……だが、お前が提供できるのはミルクだけではなからう」

少年悪魔は豪奢な肘掛け椅子を出現させ、腰を下ろす。

ゆっくりと組み替えた爪先を美少女の丸出しの尻に向けると、尖った靴の先端を「ずぶ



りッ」と乙女の尻穴にねじり込む。

「ひいんっ、ま、またお尻……ッ」

「そういえば今朝から紅茶を何杯も飲んでいただろう。この辺りにも乳とは違う液体を溜め込んでいるんじゃないか？」

「ふあああつ、そこらめつ、お、おしっこ漏れッ……!」

背後から尻穴をぐいぐい押すと膀胱が圧迫される。

黄金水が詰まった乙女のタンクを、オロガスは残忍な笑みを浮かべて刺激する。

「ご主人様の命令だぞ。乳からのミルクサーピスに加え、そのはしたない股ぐらからも別のジュースを提供するのだ」

「み、みんな見てるのに、そんなことを……あああつ、お、押さないでええっ」

圧迫された膀胱が激しい尿意を訴え、露出奴隷の顔が苦悶に歪む。

尿道を必死に締める内股は、いつ決壊してもおかしくはない。

乳房に群がる人間たちは、容赦なく責め立てて母乳を搾乳し続けている。

「きききつ、こ、こつちからは何を出してくれるんだ、エロ乳女？」

「お、オレの予想ではちよつと塩味の利いたレモンジュースが出るような気が激しくするぜ！ ちよつと塩分を補給しなかったところだ」

数人の男がクレメンティアの股の下にコップを突き出し、放尿を促す。

その顔は肉欲と、尿意を堪える少女の恥ずかしい顔を堪能する、正真正銘ゲスの顔に他ならない。

彼らの顔を見ているだけで、クレメンティアの顔には恍惚の色が浮かぶ。

「だ……だめ、れすう。本当に出ちやう、レモンジュース出ちやう……ッ」

「いいから出せ、出しちまえよ！ 尿道がぱっくり開くとこまで、ぱっちり見物してやるから、小便漏らしちまええ！」

ほとんど地面に這いつくばるような格好でコップを突き出す男たち。そして申しあわせたかのように、一斉に「漏らせ」コールが巻き起こる。

膀胱への圧迫、限界と羞恥心との板挟みで、美少女の目尻に大粒の涙が浮かぶ。

宝石のような美少女の涙も、哀れげにふるえる唇も、群集のサディスティックな狂騒を煽り立てる材料に過ぎない。

「漏・ら・せ！ 漏・ら・せ！ 漏・ら・せ……ッ!!」

「いやあ……恥ずかしい、です……でも、もう我慢できない……ッ」  
ぷしっ。

左右の乳首が思いきりつねり上げられたのと同時に、尿道がついに決壊する。

勢いよく噴き出した黄金の水流は、待ちかまえていたコップの縁で飛沫となつて飛び散り、持っていた男は慌てて水流を受け止める。

「うおおお、すげえ湯気に、すげえ匂いだ！」

「溢れるぞ、次はオレに受けさせる！」

「ああああ、おしっこコップに受けられてるうううッッッ」

緊張が解け、情けない声を漏らすクレメンティアの股間からは、途切れることなく延々と聖水が迸り続ける。

突き出されたいくつものコップに黄金水がなみなみと溜まる。人々は腰に手を当て、ごきゅごきゅとそれを飲み干していく。

「うぐううう、うめっ、小便うめえええええええ」

「ふわああああ、わたくしの恥ずかしいおしっこが、ごきゅごきゅ喉を鳴らして飲まれてますううッ」

「むう、なんと芳醇な香り、適度な塩加減……まさに聖水！」

「ああ、テイステイングまでッッ」

男も女も年寄りも若者も関係ない。

乳と股間を丸出しの、エッチなサービススタンドが提供する母乳と黄金水を、甘露のように飲み干しては恍惚に浸る。

膀胱いっぱい溜まっていた聖水の勢いは止められず、揉みくちやにされる乳房からも甘い母乳が搾り取られ続ける。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

酒井仁 挿絵・池田靖宏

# 無敵の姫騎士が

# ドMに目覚めたようです

## わたくしをメスメスと 罵りなさい!!

類い稀な剣の才能を持つ、美しき姫騎士ローゼリア。あまりの強さゆえ相手になる敵もおらず、退屈な日々を過ごす彼女だったが、あるとき覚醒すること。"あえて自らに試練を与え、それを乗り越えること"で、さらに己を高めることができる——! かくして、わざと責めを受けて、そのたびになんだか興奮しちゃう、変態冒険譚が始まった!

# 好評配信中!

100が△△ようです!

シリーズ  
第1弾



仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義元が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！  
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

# 待たせたら

毎月中旬  
発売!!

18歳未満の方は  
購入できません

18

漫画：老眼  
原作：斐之嘉和  
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス  
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中

**悪の秘密結社vs正義のヒーロー**  
イケない戦いの記録!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説：高岡智空 / 挿絵：鈴眼依鐘】



全国書店で  
好評  
発売中

「…藤田君は責任取るべき」  
陸月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪凷】



宇宙海賊学園ブラッククィーン

【小説：Kypnosus / 挿絵：ごまちゃん】

全国書店で  
好評  
発売中

**生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!**  
海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?



**既刊LINEUP**

全国書店で好評発売中

- 仙獣学園戦姫ノブナガ! ①～③
- 坂田唯らいっ!【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエール

- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりて語る愚者の夜

- ビルグリムメイデン ①～②
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです
- 殉魔!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!



# 仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで——!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評**  
発売中

# 仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 弐

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫〉景虎、宇佐美く奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評**  
発売中



**仙獄学艶戦姫ノブナガツ！参**

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評  
発売中**

**BLANGEL**

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●**夜士郎**  
原作・挿絵●**渡瀬行人**



全国書店で  
**好評  
発売中**



## 思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田陸月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！ ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する！

小説●さかき傘  
挿絵●天海雪乃



全国書店で  
**好評  
発売中**

## 思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、陸月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！ “蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘  
挿絵●天海雪乃



全国書店で  
**好評  
発売中**



## 借金お嬢クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で  
好評  
発売中

## 借金お嬢クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!? 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で  
好評  
発売中

# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



# 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!